

群 教 セ	I01 - 08
	平27.257集
	特 - 自・情

自閉症・情緒障害特別支援学級における、 より良い関わりを育む自立活動の指導

— 友達との関わり合いのよさを実感できる集団活動の工夫 —

特別研修員 金子 勝美

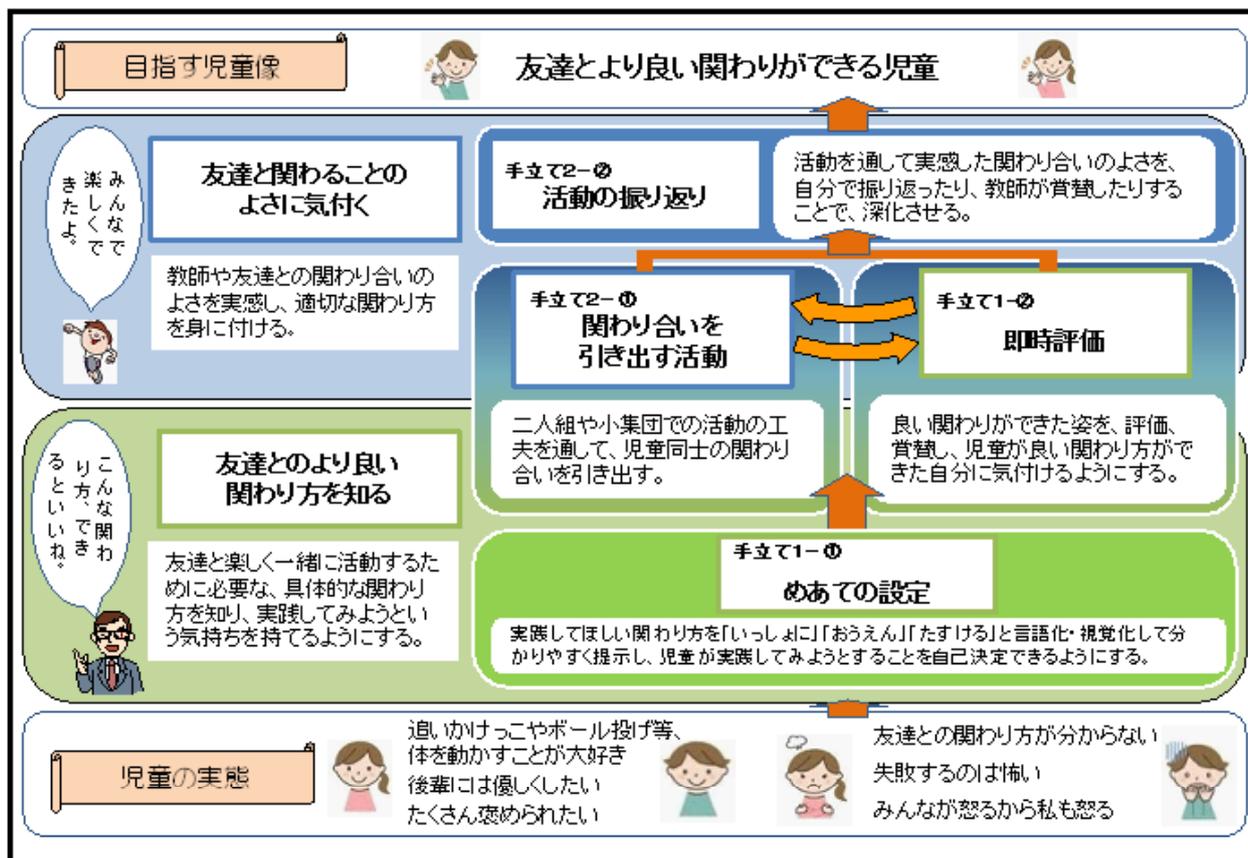
I 研究テーマ設定の理由

小学校自閉症・情緒障害特別支援学級には、対人関係の形成に関し、困難さを抱えている児童が多く在籍していることがある。本学級の児童においても、自閉症などの障害特性により、友達の気持ちを察することが苦手なトラブルになってしまったり、集団で活動する際のルールなどが理解できていないために、活動に参加できずに困ったりしている様子が見られることがある。このような児童が、より良い人との関わり方を身に付け、広げていくことは、どの子にとっても将来の豊かな生活につながる大切な力となる。より良い人との関わり方を身に付けていくためには、より良い関わり方を知り、ロールプレイなどを通して体験し、具体的な場面での実践を通して身に付けていくことが大切である。また、何よりも、意欲的・主体的な活動を通して、人との関わり合いのよさに児童自身が気づき、実感する体験を積み重ねていくことが重要であると考えた。

そこで、本研究では、児童が相手（友達）の存在を意識できる種々の集団活動に取り組む中で、(1)友達とのより良い関わり方を知り、(2)友達との関わり合いのよさに気付くことを通して、人との関わり合いのよさを実感し、より良い関わり方ができるようにしたいと考えた。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

本研究では、友達との関わり合いのよさを実感できる集団活動の工夫を通して、個々の児童がより良い関わり方を身に付けていけるようにするために、「友達とのより良い関わり方を知ること」、「友達との関わり合いのよさに気付くこと」の2点に視点をあて、以下のような手立てを講じていく。

(1) 友達とのより良い関わり方を知るための手立て

①めあて設定の工夫

友達とのより良い関わり方をイラストやキーワードで視覚的に児童に示したり、実践してみようとするより良い関わり方を、イラストなどを使い、どの児童も自己選択できるようにしたりして、一人一人の児童がめあてを持って活動に取り組めるようにする。

②より良い関わり方ができた自分に気付ける評価の工夫（即時評価）

教師は、より良い関わり方ができている児童をその場で評価・賞賛するとともに、「なかよしシール」を渡し、児童自身がより良い関わり方ができた自分に気付けるようにする。

(2) 友達と関わることのよさに気付くための手立て

①児童同士の関わり合いを引き出す活動の工夫

児童の興味・関心や日頃の人間関係を基にした、二人組やチームによる活動を取り入れ、友達と一つの目標を達成したり、友達を応援したりする場面を設定していく。加えて、自由活動を取り入れ、用具を友達に譲ったり、共有したりする場面となるようにしていく。また、児童同士の関わり合いを引き出すために、教師は話合いの進行や児童同士のやり取りの仲介を行うなどして、児童同士の関わり合いを支援する。

②友達との関わり合いのよさに気付くための振り返りの工夫

毎時間の最後には、個々の児童が自己選択しためあてや「なかよしシール」を基に、振り返りを行う。自分ができたより良い関わり方や友達の良い関わり方について発表し合い、互いに認め合ったり、教師が価値付けしたりして、自己有用感を高め、友達との関わり合いのよさを実感できるようにする。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- より良い関わり方をイラストやキーワードで示したこと、児童がどんな関わり方を実践してみようかと自己選択できるようにしたこと、一人一人の児童がめあてを持って活動に取り組めた。また、より良い関わり方ができた際、その場で教師が評価・賞賛したこと、振り返りの際、児童は自分ができたより良い関わり方を教師や友達に伝えるなど、より良い関わり方の理解を深めた様子が見られた。
- 児童同士の関わり合いを引き出す集団活動の工夫により、どの児童も主体的に活動に取り組むことができた。児童の主体的な活動になったことで、「○○ちゃん頑張れ」や「○○君、ごめんなさい」といった、友達との関わりを深める場面が生まれ、友達との関わり合いのよさを実感し積み重ねる経験につなげることができた。

2 課題

- 即時評価は、より良い人との関わり方ができたことを実感させるためには、有効な手立てであったが、児童の活動を中断してしまうことがある。評価するタイミングや個々の児童の実態に応じて、どの程度評価を行えば良いのかといった検討を行う必要がある。
- 本活動で身に付けたより良い関わり方を、他の集団や場面においても実践することができるよう、個々の児童の成長を校内や家庭とで共有し、一般化を図っていく必要がある。

＜授業実践＞

実践 1

1 自立活動 題材名 「みんなでからだをうごかそう」 (第1～6学年・1学期)

2 本題材及び本時について

本題材は、児童がクラスの友達と一緒に体を動かす活動に取り組みながら、友達との適切な関わり方を知り、関わり合いのよさに気付くことをテーマとした。

友達との関わり方に関する児童の実態は、仲間同士で協力して活動に取り組むことができる中・高学年児童から、感情のコントロールが苦手で、上手に友達に関われない低学年児童まで様々である。本時では、相手の存在を意識しながら行う二人組での活動（ボール送り、体ほぐし）やサーキットリレー、自由活動を設定し、活動の楽しさとともに、友達と協力することのよさを実感できるようにする。サーキットリレーでは、ケンパー跳びや平均台渡りなど、多動性や衝動性の高い児童にとっても、どこでどのように運動すれば良いかが分かりやすい運動を取り入れ、どの児童も参加できる活動としていく。

学習の初めには、各活動でどんな関わり方をすれば良いのかを考える時間を設け、個々のめあてをホワイトボードに書き留めて、いつでも児童が確認できるようにする。また、教師は児童の関わり方を見取って評価・賞賛することで、児童がより良い関わり方に気付けるようにする。

リレーなどの競争の場面では、同じチームの友達を応援する、チームのために力を発揮するといった、児童に身に付けてほしい力を実践の中で指導できるようにしていく。加えて、自由活動の時間も設定し、荷車乗りやボール送りなど、児童同士が折り合いをつけながら活動する場面としていく。

活動のめあての設定や振り返りについては、児童全員で行い、互いに賞賛し合うことで、関わり合いのよさに気付けるようにしていく。

3 授業の実際

(1) 友達とのより良い関わり方を知るための手立て

①めあて設定の工夫

授業の導入では、大型のホワイトボードに本時の活動の写真を用いて提示し、各活動で、友達と一緒に楽しく活動するためにはどうしたら良いかを考える時間を設定した。児童はどんなことに気を付けて友達と活動すれば良いのかを考え、めあてを発表することができた。低学年の児童には教師が活動の写真を示し、「ボール投げの時には、『いくよ』と声をかけようね」などと、児童に合わせためあてを提案した。個々の児童が発表しためあては、ホワイトボードに記録し、振り返りで使用できるようにした(図1)。



図1 ホワイトボードを利用しためあての設定と掲示

②より良い関わり方ができた自分に気付ける評価の工夫(即時評価)

自由活動の場面で、荷車を連結して遊ぶアイデアを出した児童や、友達のためにロープを率先して引っ張っていた児童には、その場で「みんなで遊べる意見が出せたから、みんなが楽しく遊べたね」「(ロープを)引っ張ってくれたから、みんな楽しそうに遊んでいるよ」と言葉をかけ、賞賛した(図2)。



図2 荷車を共有した活動

(2)友達と関わることのよさに気付くための手立て

①児童同士の関わり合いを引き出す活動の工夫

- ボール送りの活動では、ボールを受渡しする際、「はい」と言葉をかけることや相手が受け取ったのを見てから手を離すと良いことなど、教師が手本を示して伝えたところ、「行くよ」や「いいかい」など、児童同士でやり取りしながら活動することができた（図3）。
- サーキット運動は、チーム同士の対抗戦で行うこととした。ビブスの使用により、よりチーム意識(仲間意識)の高まりが見られ、「〇〇君頑張れー」と声援する姿や、「次は〇〇君だよ」と仲間に言葉をかけ、送り出す姿が見られた。
- 自由活動の場面では、日頃から児童の興味・関心が高く、活動を工夫したくなるような教具（荷車やキックスケーターなど）を用意し、自由に選択させる中で、共有や譲り合いなどの関わり合いの場面となるようにした。荷車遊びを選んだ数名の児童は、交替で使うための順番決めを行ったり、荷車を連結させ、ロープをつないで引っ張る係を決めたりするなど、アイデアを出し合いながら、楽しく活動することができた。



図3 友達に声をかけながら
ボールを渡す

②友達との関わり合いのよさに気付くための振り返りの工夫

振り返りの場面では、ホワイトボードを児童の前に提示して、個々のめあてを振り返った。児童一人一人の頑張ったことや、教師が見取った良い関わりへの賞賛を全体で共有し、認め合うことができた。

4 考察

- 自由活動では、二台しかない荷車に6～7名の児童が集まったが、荷車を連結し、ロープを結ぶというアイデアが児童から出たことで、乗る人と引っ張る人などの役割が発生し、集団遊びに発展させることができた。
- 活動の一つ一つを、必然的に人とのやり取りを発生させる活動としたことや教師がその手本を示したことで、児童は友達を励ます言葉かけを行ったり、友達に順番を譲ったりするなどの良い関わり合いを数多く実践することができた。
- サーキットリレーでは、チーム意識が高まるにつれ、友達が走る様子に注目し応援を行ったり、順番待ちなどのルールを自分から守ったりできる児童が増えていった。また、日頃、走ることを苦手としている児童が友達の声援を受け、全力で走ろうとする姿が見られた。
- 活動のめあてを持たせる場面では、友達と仲良くするためには、どうすれば良いかを具体的に発表できる児童が少なかった。児童が、関わり方のイメージを明確にできるような、「なかよくするために」「たすけるために」などのイラストを用意し、これを手掛かりにめあてを考えさせる必要がある。
- 振り返りの場面では、良い関わり合いができていたことを教師が説明しただけでは、十分に振り返ることができていない児童がいた。良い関わり合いができた自分に気付ける手立ての充実が必要である。また、振り返りの時間が不十分であったため、一人一人ができたことを実感するだけの振り返りができなかった。T2、T3と協力し、少人数で振り返りを行うなどの改善が必要となった。

実践2

1 自立活動 題材名 「なかよくからだをうごかそう」 (第1～6学年・2学期)

2 本題材及び本時について

本題材は、児童がクラスの友達と一緒に体を動かす活動に取り組みながら、友達とのより良い関わり方を知り、友達との関わり合いのよさを実感することをテーマとして、年間を通して自立活動に位置付けて取り組んだものである。

1学期の実践から、より良い関わり方を実践してみようとする活動のめあてを、どの児童も持てるようにすることや、良い関わり方ができていることに気付かせることが課題であると考えた。そこで、本時では、「体を動かす」という活動に気持ちが向かいがちな児童に、「友達と楽しく活動するためにより良い関わり方をやってみよう」という、めあてをしっかりと持てるようにすることが大切だと考えた。児童へのめあての持たせ方として、「たすける」「いっしょに」「おうえん」という、より良い関わり方をイラストとキーワードにしてホワイトボードに提示し、そこから本時のめあてを一人一人に自己選択させることとした。

また、活動中は、良い関わり方ができた自分に気付けるよう、即時評価を心がけ、「今、助けてあげられたね。今のが『たすける』だよ」などと言葉をかけ、なかよしシールを渡し、振り返りの手掛かりとできるようにした。

振り返りは、少人数グループで行い、児童が時間をかけて振り返ったり、教師と一緒に振り返ったりすることができるようにする。

3 授業の実際

(1)友達とのより良い関わり方を知るための手立て

①めあて設定の工夫

「たすける」「いっしょに」「おうえん」という、人との関わり方の視点をキーワードとイラストにして示したことで、児童は自分が実践しようとする関わり方のイラストがある場所へ自分の顔のマグネット（なかよしマグネット）を貼り、本時のめあてとすることができた（図4）。

児童はこれまでも、自分が頑張ること（めあて）を選んでマグネットを貼るという経験があったため、本時でも自分がやってみようとする関わり方を自分で決めることができた（図5）。

低学年の児童は待ちきれない様子でマグネットを貼ったが、「ぼく

は『たすける』を頑張るよ」と言いながらイラストの顔の部分に自分の顔の写真を貼っていた。まさに、イラストに示された関わり方を自分のやるべきことに重ねている様子が感じられた。中・高学年の児童は、線の境界線上に顔写真を貼り、「ぼくは『たすける』『おうえん』『いっしょに』を全部頑張る」と言いながら顔写真を貼る姿が見られ、

個々の実態に応じためあての設定をすることができた（図6）。



図4 めあてを設定するための支援



図5 自分の顔写真をはってめあてを決める

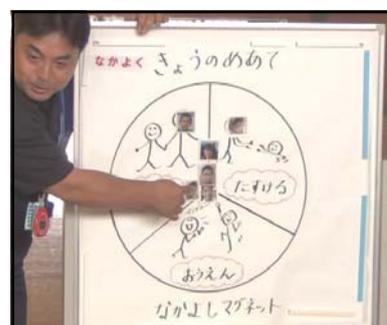


図6 児童が設定した本時のめあて

②より良い関わり方ができた自分に気付ける評価の工夫（即時評価）

児童の良い関わり方が見られた際、教師は、児童の肩にある「なかよしメダル」に「なかよしシール」を貼りながら、賞賛の言葉をかけるようにした（図7）。馬跳びの活動では、体を精一杯小さく丸めていた児童に、「友達が跳びやすいように助けてくれるいるんだね」と言葉をかけながら、メダルの「たすける」の所になかよしシールを貼った（図7・8）。児童は、「だって、跳びやすくしてあげると、『たすける』になるから」と自分の行動の意味をつかんだと考えられる発言が見られた。



図7 なかよしメダルと
なかよしシール



図8 即時評価の様子

(2) 友達との関わりよさに気付くための手立て

①児童同士の関わり合いを引き出す活動の工夫

二人組で取り組む活動として馬跳びと的当てを取り入れた。馬跳びでは、二人で10回、的当てでは、二人で交替しながら9枚の板に、できるだけ早く当てるという目標を設定し、中・高学年と低学年の児童のペアで取り組むようにした。

馬跳びでは、10回のうち何回ずつ跳ぶかを話し合う時間を設定すると、中・高学年の児童は低学年の児童の意見に耳を傾け回数を決めようとする姿が見られた。

的当てでは、活動に参加することを難しそうにしていた低学年児童に、ペアの中・高学年の児童が玉を手渡して誘う様子が見られた（図9）。



図9 友達に玉を渡して活動に誘う

②友達との関わり合いのよさに気付くための振り返りの工夫

振り返りは、T1、T2、T3が児童を三つのグループに分けて行った。児童は、ホワイトボードに貼った自分のめあてや肩にある「なかよしシール」を見ながら、自分がどんな関わり方ができたのかを自信を持って発表することができた（図10）。

また、少人数による振り返りとしたことで、教師は児童一人一人へ具体的な賞賛ができるようになり、児童は「先生、あと、こんなこともできたんだよ」「先生、私の話も聞いてください」などと、感じたことや友達との関わり合いのよさを意欲的に伝えるようになった。低学年の児童は「なかよしシール」の数を一生懸命数え、できたことへの満足感を得ている様子も見られた。



図10 TTIによる少人数での
振り返り

4 考察

- 友達との関わり方をイラストやキーワードで示したことで、どの児童も学習のめあてを持って活動に取り組めることができるようになった。また、めあてを自己選択させることにしたことで、中・高学年の児童は複数のめあてを持って活動に取り組むことができるようになるなど、個々の実態に応じためあてが持てるようになった。
- 即時評価により、児童は、より良い関わり方ができた自分に気付き、「もっとやってみよう」「他にはできないか」と意欲を高めながら活動に取り組むことができた。
- 振り返りを少人数で行うことで、児童が自分の関わり方を自分の言葉で伝える時間とすることができた。また、教師も丁寧に評価・賞賛することができるようになり、児童が主体となってより多くの人との関わり合いのよさに気付くことができたものとする。
- 即時評価の場面では、児童の活動を妨げないという配慮から、教師が無言で「なかよしシール」を貼ることも多かった。教師が即時評価する際の言葉の選択やタイミングを検討していく必要がある。